

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 小林銀河

小林銀河氏の論文「ドストエフスキーにおける《личность》と《индивидуальность》の用法」は、19世紀ロシアを代表する作家ドストエフスキーの文学を「個としての人間」を示す言葉《личность》と《индивидуальность》を手掛かりに考察し、この作家の創作技法を明らかにしようとしたものである。

フョードル・ドストエフスキー(1821-81)の作品は日本でも長い受容と研究の歴史がある。今日新たな視点からの発見を提示することは容易でない。小林氏は敢えてこの難題に取り組み、ロシア、ペトロザヴォーツク大学のザハーロフ教授研究グループが作成したドストエフスキー・コンコーダンスを用いて《личность》と《индивидуальность》の用法の分析を行い、ドストエフスキー研究に新たな一步を刻んだ。

本論文は序、結論と本論三章から構成されている。第一章ではまず、《личность》と《индивидуальность》の意味が語形成の歴史、多言語との関係等、多様な視点から考察され、次にドストエフスキー研究の歴史においてそれらの用語が果たしてきた役割についての調査が行われた。併せて文学研究におけるコンコーダンスの可能性と本論文での利用方法の確認もなされた。第二章ではコンコーダンスに依拠しつつ、ドストエフスキーの全作品を通じてこの二語の使用にどのような傾向と変化が見られるかが考察された。ドストエフスキー作品では《индивидуальность》より《личность》の登場頻度が遙かに高いこと、《личность》は初期作品には殆ど登場せず、後期への移行期に位置する『死の家の記録』に多出していること等の諸点が指摘された。さらに個々の作品が取り上げられ、綿密なテキスト分析を通してそれら二語の意味と役割が問われた。第三章ではロシアの他の作家とりわけ19世紀ロシア思想の発達に関わりの深いプーシキン、ゲルツェン、ロスキーの著作における二語の用法の詳細な考察がなされた。考察の結果、ドストエフスキーの用法の独自性及び時代との共通性が明らかになった。巻末にはコンコーダンスを再構成した独自の用語表が添付されており、小林氏の論述を裏づける有効なデータとなっている。

本論文はコンコーダンスを利用して、これまで看過されてきた、あるいは曖昧であったドストエフスキー文学の諸特徴を確定的なものとし、この作家の特質を説得力のある論述によって描き出している。ドストエフスキー研究に新たな成果をもたらす意義ある仕事であった。

審査の過程では、<コンコーダンスの利用に際してはより多面的複合的な方法の検討も必要ではないか>との意見が出された。しかしこの指摘は本論文の本質的な欠点を意味するものではなく、むしろ小林氏の今後の研究に期待するものであろう。以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位に充分値するものであるとの結論に至った。